

古フランス語における *douter* と *se douter*

福田 由美子

0. はじめに

現代フランス語において、*douter* とそれに *se* をそえた形（以下、代名動詞とよぶ）*se douter* は、*Larousse Nouveau Dictionnaire de Français* では次のように記されている。

(a) *douter* : v.t. ind. 1 Être incertain de la réalité d'un fait, de l'exactitude d'une affirmation, de l'accomplissement d'une action, de la conduite à tenir. (確信が持てない)

2 Ne pas avoir confiance en qqn. qqch. (信頼できない)

(b) *se douter* : v.pr. Avoir le pressentiment de, s'attendre à ; soupçonner. (ありうることだと思う、～であろうと推測する)

ところが、古フランス語の辞書 *Godefroy* (1881) では次のように記されており、現代フランス語における意味とはかけ離れているようにおもわれる。

(a) *douter* (*doubter, doter, dotteir, dolter, dulter*); *craindre, redouter* (恐れる、怖がる)

(a') *se douter*; dans le même sens (*douter* に同じ)

本稿では、まず古フランス語における代名動詞の用法を概観する。そして、*douter* の語源から出発し、古フランス語における *douter* / *se douter* の用法を観察し、*se* がどのようなはたらきをしているかを考察する。その際に、古フランス語のテキスト *Le Roman de Tristan en prose* (以下 *Tristan*) と *La mort le Roi Artu* (以下 *Artu*) をコーパスとし、古フランス語において *douter* と *se douter* が実際にまったく同じ意味でもちいられていたのかどうかを検証する。

本稿は、現代フランス語における *douter* と *se douter* の意味の違いについての仮説

をたてるための、ひとつの手掛かりとして位置付ける。

1. 古フランス語における代名動詞

現代フランス語の代名動詞の用法の分類は、*grammaire expliquée du français* によると、*réfléchi* (再帰的用法)、*réci-proque* (相互的用法)、*passif* (受動的用法) と *essentiellement pronominal* (本来的用法) の4タイプである、また、それらの分類の呼称はほとんどすべての文法書に共通している。

現代フランス語と同様に古フランス語においても、動詞に *se* (あるいは *soi*) をつけた形である代名動詞が頻繁にみられる。古フランス語におけるその用法は、現代フランス語における用法と基本的には同じであるが、さらに、*se* を伴った形と *se* を伴わない形とが、かけはなれた意味になるタイプや、同じ意味になるタイプも存在する。本稿であつかう *douter* / *se douter* は、一般には後者のタイプに属しているとされており、現代フランス語とは大きく異なっている。

そこで、古フランス語に関する文法書から、古フランス語の代名動詞の、現代フランス語のそれとは異なっている特徴について述べられている部分を抜粋して概観する。

1.1. Philippe Ménard と Gérard Moignet の分類

Moignet (1984) と Ménard (1988) によると、古フランス語における代名動詞の *réfléchi*, *réci-proque*, *passif* の用法は現代フランス語と同様であるが、それらに当てはまらないものを、現代フランス語の *essentiellement pronominal* も含めて *moyen* (中立用法) としている。

Ménard (1988) は次のような例文をあげ、*moyen* にはそれぞれ *insistance* (固執、強調) (1)、*duratif* (継続) (2)、*ingressif* (起動) (3)をあらわす用法もある、と述べている。

(1) *Aiols se regarda, vit le portier.* (*Aiol*, 3641)

« *Aiol regarda, il vit le portier.* »

「目を凝らして見ると守衛が目に入った。」

ここでいう強調とは、目的をもって一生懸命に見るということである。

(2) *Carles se dort.* (*Roland*, 724)

« Charles est en train de dormir. »

「眠っている最中である。」

(3) *Après se sieent li baron.* (*Robert le Diable*, 2201)

« Ensuite les barons s'asseoient. »

「立っていた諸侯が座る。」

古フランス語の *seoir* は現代フランス語の *s'asseoir* や *être assis* の意味をあらわすので、*se* をもちいることなく「座る」の意味をあらわすことができるが、*se* がつくると起動の意味に限定される。

また、*moyen* に含まれる意味は、強調、継続、起動だけでなくさまざまである。たとえば Moignet (1984) は、*se* のある形とない形で意味が異なる動詞として、次のような例をあげている。

scharguaitier « faire le guet » 「見張り番をする」; *soi escharguaitier* « se tenir sur ses gardes » 「用心する、警戒する」

apercevoir « percevoir par les sens » 「知覚する」; *soi apercevoir* « prendre consience de quelque chose » 「自覚する」

desjeûner « déjeuner » 「昼食を食べる」; *soi desjeûner* « se faire sortir de l'état de jeûne » 「やっと食事にありつく」

さらに次のような例をあげ、*se* がつくことで、文脈によっては次のような意味になる場合もあると述べている。

soi dire « assumer la responsabilité de ses paroles » 「自分の発言に責任をもつ」

soi penser « se préoccuper » 「気にかける、心配する」

soi morir « être en train de mourir » (nuance durative), 「死にかけている」

ou « être surpris par la mort » (il peut s'agir d'une mort subite) 「急死する」

このように Moignet (1984) と Ménard (1988) は、古フランス語における代名動詞の *moyen* の解釈は非常にさまざまで、文脈によって決まるものである。そしてまた、動詞のあらゆる事行は、外部へのはたらきかけのみにとどまらず、その結果や状態が主体自身にもどるという意味において、受身的な性質をもつと述べている。

1.2. Claude Buridant と Ludo Melis の分析

Melis (1990) と Buridant (2000) は、古フランス語の代名動詞は *réfléchi*, *réciroque*, *passif* の意味をもつが、それ以外にもさまざまな意味をもつので、Moignet (1984) と Ménard (1988) のように「用法」としては分類せず、動詞と *se* によってもたらされる意味によって分析している。

そして次のように述べている。現代フランス語では、*se* は動詞と密接につながっているが、古フランス語においては主語とのつながりが深い、いいかえれば、*se* が主語との優先的な関係をもっている。そして、動詞のあらゆる事行への主体の関与を強調する。このとき *se* を伴った代名動詞は、受身的な性格をもつ。

たとえば Buridant (2000) は、*se* がつくると主体が外部から受けた意識を強調する動詞として例をあげているが、そのいくつかと例文を抜粋する。

s'asseürer « être certain, avoir confiance » (確信している)

se croire « croire » (信じる)

se douter « craindre, avoir peur » (恐れる、怖がる)

s'esfreer « s'alarmer, s'effrayer » (怯える)

se vergonder « avoir de la honte » (羞恥心をもつ)

(4) *Soef chevauche, car forment se douta.* (*Aliscans*, 1086)

« Il chevauche silencieusement, car il est rempli de crainte. »

「彼は静かに馬を進める、というのは、彼はとても怖がっているから。」

Buridant (2000) によると、*douter* については、主語の意識を強調するとき *se douter*

がもちいられていたということである。すると、(4) における *se douter* の解釈は、主体が怖がっている対象物よりも、主体が受けている「怖い」という感情を伝えた文であるということになる。それがいわゆる「受身的」なのである。いっぽう Godefroy (1881) では、両者はまったく同じ意味であるとされている。そこで、コーパスに基づいて、実際にどのようなもちいられていたのかを調べてみる。

その前に、*douter* の語源から出発し、なぜ *douter* が古フランス語では *craindre* の意味でもちいられていたのかを明らかにする。

2. 語源からの考察

2.1. 語源辞典の記述

Dictionnaire Historique de la Langue Française によると、*douter* の語源は、*deux* をあらわすラテン語 *duo* から派生した *dubitare* で、その意味は « *hésiter entre deux choses, être indécis* » である。*douter* は、古フランス語の時代には *craindre* の意味でもちいられ、その後、強調をあらわす接頭辞 *re-* のついた形も同時にもちいられるようになる。つまり、*redouter* と *douter* と *se douter* が同じ *craindre* の意味でもちいられていたのである。

それでは、なぜ *douter* が *craindre* の意味でもちいられていたのだろうか。

2.2. *douter* と *craindre* の意味について

douter の語源はラテン語の *dubitare* で、*hésiter* の意味である。つまり、二つのうちの一つを選ぶのに迷う、ということである。いいかえれば、迷う時の不確かさや不安感を内在する動詞である。

また、*craindre* の語源はラテン語の *tremere* « *trembler* » 「揺れる」である。この動詞もまた、人間の内面の不安をあらわすときにもちいられる。では、*craindre* ほどのような場面でもちいられるのか、現代フランス語から例をあげて観察してみる。

(5) Il craint d'avoir été maladroit.

(*Le Robert brio*)

「うまくできなかったのではないかと心配している。」

(6) *Il ne viendra pas, je le crains.*

(*Ibid.*)

「彼は来ないだろう、私はそれを心配している。」

(5)では、うまくできていなかったのではないかという、主体にとって都合の悪い方を頭に描くときの不安を、(6)では、彼が来ないだろう、という前提がありながらも、主体には「彼が来る」という期待があり、起こってほしくない方のことを頭に描くときの不安を、*craindre* をもちいて伝えているのである。

このことから *craindre* は、その語源も考慮に入れると、本質的には選択肢を二つもつという意味のラテン語 *dubitare* (= *hésiter*) の意味を含んでいるといえる。よって、古フランス語の *douter* が *craindre* の意味にもちいられていたことは、じゅうぶんに説明できるのである。

ただし、古フランス語の *douter* と現代フランス語の *craindre* の意味がまったく同じであるかどうかは、研究の余地がある。なぜなら、古フランス語のテキストにおいて、人間が迷う際に生じる不安や恐れを伝えるために、現代フランス語の *craindre* という訳語を採用してはいるが、両者が 100 パーセント一致するとは断言できないからである。

それでは、なぜ *douter* から *craindre* の意味が薄れ、現代フランス語の意味になったのであろうか。

2.3. *douter* から *redouter* へ

人間というものは、心に不安や恐れを持ち、それを対話者に伝えたいと願う時には、出来るだけ強調して伝えたいものである。そこで生まれたのが強調の *re-* を接頭辞にした *redouter* であるようだ。そうすると、不安や恐れを伝える時には、当然のことながら *douter* よりも *redouter* の出番の方が多くなる。そのため *douter* は不安や恐れよりも、本来の意味である迷いの感情を述べるときにもちいられるようになり、*douter* と *redouter* の役割分担ができ上がり、それが現在にまで残っているのだと推測できる。その結果、現代フランス語では *redouter* は *craindre* と同様の価値をもち、いっぽう *douter* には *hésiter* の意味合いが残っている。

ところが *se douter* の方は、*douter* とは違った変容をみせる。つまり、現代フラン

ス語での *se douter* には、*hésiter* や *craindre* の価値が含まれていないようにおもわれるのである。それは *se* のためであると考えられる。

次に、古フランス語における *se* のはたらきを観察するために、*douter* と *se douter* がどのようにもちいられていたかをさぐってみることとする。

3. *Tristan* と *Artu* のコーパスから

3.1. 構文の比較

本稿では、主に *Tristan* のコーパス調査の結果を述べる。必要な場合は *Artu* のコーパスも取り入れるが、*Artu* には *douter* を含む例文が少ないため、大きく頼ることはしない。また、現代フランス語に関するデータは、*Le Robert brio* (2004) と *Larousse* (2006) を参照している。

まず最初に、*douter* と *se douter* が、現代フランス語と古フランス語ではどのような構文で用いられているかを、表に示した。

(F.M.=français moderne, A.F.=ancien français, T=*Tristan*, A=*Artu*)

douter	F.M.	A.F.		se douter	F.M.	A.F.	
		T/80	A/14			T/22	A/1
douter φ	—	3	1	se douter φ	—	4	—
douter N	—	56	7	se douter N	—	—	—
douter de N	+	7*	—	se douter de N	+	13	—
douter de inf.	+	—	3**	se douter de inf.	—	1	—
douter que...subj.	+	7	3	se douter que...subj.	—	4	1
douter que...ind.	—	—	—	se douter que...ind.	+	—	—
être douté	+	7	—				
ne pas douter	+	35/80	5/14	ne pas se douter	+	—	—

*うち5例は *en douter* である。

***douter a «à» inf.* を含むが、*a* と *de* の違いについては本稿では言及しない

構文においていくつかの違いがみられる。まず、現代フランス語においては、名詞 N を目的語とする場合には *douter* も *se douter* も必ず *de* を伴う。いっぽう古フランス語では、N の前に *de* のある形もない形も両方確認されている。また、目的語として *que*～節（以下 P）をしたがえる場合、現代フランス語では *douter* のあとに続くのは必ず接続法で、*se douter* に続くのは直説法であって接続法は続かないのであるが、古フランス語の *Tristan* と *Artu* のテキストでは、*douter* も *se douter* もあとに続く P は接続法である。

また、前述のとおり、古フランス語の辞書においては、*douter* と *se douter* は同じ意味で、現代フランス語にすると *craindre*, *avoir peur*, *redouter* であると記されている。しかし、それだけでは *se* に関する説明が十分ではない。この章では、それぞれの意味を構文によって分類し、*se* のはたらきに着目しながらその違いを検討する。その際手がかりになるのは文脈と意味のみである。

3.2. *douter*

3.2.1. *douter* ϕ , *douter* N

目的語のない場合でも *douter* には対象があり、それは文脈によって明らかであるので、(7) の *douter* ϕ は (8) と (9) の *doute* N と同様とみなしても差し支えないとおもわれる。また、(9) に関しては尊敬の念も含まれているように感じられるので、敢えて「畏れる」という表記にした。

(7) *Li faus, fait Breüs, ne doute devant k'il rechoit la colee!* (T.5-6-143-p.224)

「愚か者は、一撃をくらうまで（その騎士に対する）恐れを知らない。」

(8) *Nul autre cevalier je ne doute fors que vous deus tant seulement.* (T.1-5-116-p.183)

「あなたたち二人以外には、私はどんな騎士も恐れない。」

(9) *Tu estoies boins damoisiaus, car tu amoies et doutoies ton Creatour et disoies c'on devoit douter celui qui puet destruire et sauver cors et ame entierement.* (T.8-4-75-p.146)

「あなたは立派な若い騎士でした、なぜなら、あなたはあなたの神を愛し畏れ、肉体と魂のすべてを壊したり護ったりできる者を畏れなければならないと言っていたからです。」

3.2.2. *douter de N*

7例のうち5例は *en* がもちいられており、古フランス語での *en* の用法と現代フランス語でのそれとが同じであるとみなすと、*de+N* を *en* で受けていると考えられる。純粋に *de N* の例は(10)のなかの2例のみである。ただしこれは *noient* を副詞とみなした場合であって（その場合、*de* は「～に関して」という意味になる）、それを代名詞とみなした場合は、*douter de N* ではなく *douter N* である。

(10) Et certes de tout l'esfort de Cornuaille ne de tout le secors que de Cornuaille lour porroit venir ne **douteroie** je noient, (...) (T.4-14-206-p.302)

「そしてきっと、コルヌアイユの軍力に関しても、コルヌアイユから彼らのところに来るいかなる援助に関しても、私はまったく心配しないであろう。」

3.2.3. *douter* ϕ , *douter N*, *douter de N* に関するまとめ

douter de N は *en douter* の例も含めて、*douter N* ほど例文が多くないが、少なくとも *Tristan* においては *douter N* と *douter de N* は区別なくもちいられていたと言ってもいいだろう。

douter (de) N で、*N* が人間、あるいは当該の人にかかわる事柄やその属性を指す場合は、「恐れる」という解釈ができるようである。なぜ恐れるのかというと、*N* の属性である能力などが主体より「優っている」ことを主体がすでに知っているからである。ここにはラテン語の *dubitare* の意味はまったく認められない。また、尊敬のニュアンスが感じられる例もある。その場合もやはり、対象が主体より「優っている」ことを主体が認めているのである。

一方、*N* が人間以外の「こと」を指している時には、そうなるかもしれない、なったらどうしよう、という懸念、心配、不安が感じられ、明らかに *dubitare* の意味が認められる。

3.2.4. *douter que* ～

後述の *se douter que* ～と比較するとよくわかるのであるが、*douter* は主体の感じる

「心配」だけを伝えているという点において能動的である。

(11) *Diex le sace, fait li preudom, car certes s'il ne me garde de pres, je ne **dout** mie que li Anemis ne me puisse legierement sousprendre, (...)* (T.8-4-70-p.141)

「神はご存じです。もし傍で守ってくださらないとしても、敵が簡単に私を取り押さえることができるなどという心配はしていません。」

(12) *Par foy, fait li rois Pellés, je quit bien qu'il soit preudom. Mais je **dout** qu'il soit autrement que tu ne contes.* (T.8-9-158-p.237)

「誓って、私は彼が賢者だと思う。しかし、あなたが言っているような人物であるかどうか心配だ。」

3.3. *se douter*

3.3.1. *se douter* φ

2例とも、文脈から主体が何を恐れているのか読者には分かるが、恐れている対象よりも、主体が恐れ感情にとらわれていることを述べようとしている表現である。このことから、*douter* に *se* が添えられることによって、文のニュアンスが受身性をおびていることがわかる。

(13) *Il ne set k'il doie dire de chestui fait, car trop **se doute** durement.* (T4-1-1-p.67)

「彼はその事に関して何を言うべきか分からない、というのは、彼がとても怖がっていたから」

(14) *N'est pas de mervalle s'il **se doute** mais la grant chevalerie qu'il sent en lui le reconforte en ceste aventure.* (T.7-9-195-p.331)

「彼が恐れを抱いているとしても不思議ではない。しかし彼が自分の中に感じる偉大な騎士道が、この冒険において彼に元気を取り戻させている。」

3.3.2. *se douter de N, se douter de inf.*

(15) は、彼がランスロについては恐れをなしているのです、その騎士がランスロであつたら自分に危害が及ぶのではないかと不安になって、その騎士の名前をたずねた、という内容である。(16) では、主体が城を恐れているのは、自分が捕えられ

えることを恐れているからである。さらにその「恐れ」を強調するために、*paour et doutance* を加えている。(17) は *de inf.* をひとつの事柄としてとらえ、それに対する不安を述べている。決闘になると主体に害が及ぶことを恐れているという内容である。これら3例にも受身性があらわれている。

(15) Il avoient demandé le non du cevalier pour ce que trop durement **se doutoient** de Lancelot du Lac: (T.5-6-120-p.199)

「彼らはその騎士の名をたずねた。湖のランスロについて恐れていたから。」

(16) Et pour ce k'il **se doutoient** du castel des .IIII. freres, celui meïsmes castel ki estoit apelés la Vergoigne Uter, pour ce k'il avoient paour et doutance k'il ne fuissent illuec aresté en aucune maniere, tournerent il une autre voie; (T.1-8-147-p.222)

「彼らが4人の兄弟の館、ヴェルゲーニューテと呼ばれる城を恐れていたため、つまり、そこで何らかの方法で捕えられるのではないかという不安と心配をもっていたので、彼らは違う道へ曲がろうとした。」

(17) (...), tout soit il ensi que vous soiïés boins cevaliers, si **me douteroie** je de vous encontre cestui. (T.1-5-116-p.183)

「あなたがどんなによい騎士であっても、私はあなたが彼と決闘することを恐れるでしょう。」

3.3.3. *se douter que* ～

現代フランス語では *se douter* に続く P は直説法であるのに対して、*Artu* でも *Tristan* でも、すべての P が接続法である。

(18) La roïne conmenche a penser quant ele entent les paroles de la damoisele, car mout **se doute** durement que li rois March ne mant aucune felonnie au roi Artu et a la roïne Genievre, dont damages puisse venir. (T.4-13-176-p.267)

「王妃は乙女のことばを聞いて考え始める、というのは、マルク王がアーサー王とジェニエーブ王妃に不忠をはたらかないかととても心配しているから。」

(19) Or vous gardés en ceste queste, car je **me dout** k'il ne s'en voist prochainement en Cornuaille. (T3-1-3-p.59)

「あなたはこの探索において、気を付けてください、というのは、彼が近々コルヌアイユに向かうのではないかと、私は心配しているからです。」

(20) Quant li rois Artus le sara, je **me dout** mout k'il ne vous en sace mau gré!

(T.5-5-50-p.123)

「アーサー王がそれを知ったら、彼があなたに不満を抱かないかと、私は心配なのです。」

(21) Mais se vous orendroit vous metés pres de madame Yseut, je **me dout** mout que mesire Tristrans ne s'en courece trop durement a vous. (T.5-11-227-p.313)

「もし今あなたがイーズ様の近くへ行くなら、トリスタン卿があなたに対してとてもお怒りになるのでは、と私は心配なのです。」

4例のPのすべての動詞が接続法であること、そして虚辞の *ne* がもちいられていることから、主体はPの内容を伝えるよりも、主体の頭の中にあるPの内容が、そうなるかもしれないし、ならないかもしれない不安定な状態であるというニュアンスを含んでいることがわかる。ここに *dubitare* の意味が色濃く残っているのがみられる。また、どの文も、主体が感じた心配や恐れを主体自身に向けている、という受身的なニュアンスが感じられる。

4. おわりに

辞書には古フランス語の *douter* と *se douter* は同じ意味であると書かれているが、必ずしもまったく同じではないということが分かった。もちろん *se douter* を *douter* と同じ意味に解釈しても差し支えない文もあるが、すべての *se douter* を *douter* に置き換えて文の意味が変わらず成立するかどうかという、そうではない。主体が感じた不安や恐れを、さらに主体自身が受けるであろうことに対しての恐れや不安に変換しているのが *se douter* であるとする、うまく説明できるのである。このことから、第1章で述べたように、古フランス語では *se* を伴った代名動詞が受身的な性格をもつということがはっきりした。

しかし、本稿で扱ったコーパスはいずれも中世の騎士物語であるので、これだけで結論づけることは尚早である。今後さらにジャンルを広げて調べることは、現代フランス語の *douter* と *se douter* の違いを解明するのに役立つと確信する。

参考文献

古フランス語に関して

文献

Buridant, Claude (2000) : *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Sedes.

Frappier, Jean (1964) : *La Mort Le Roi Artu*, troisième édition, Droz.

Melis, Ludo (1990) : “Du couplage avec le sujet au couplage avec le verbe ou de l'ancien français au français moderne”, *La voie pronominale*, pp.131-139, Champs Linguistiques Duculot.

Ménard, Philippe (1988) : *Syntaxe de l'ancien français*, Éditions Bière.

Moignet, Gérard (1984) : *Grammaire de l'ancien français*, Klincksieck Linguistiques.

Stéfanini, Jean (1962) : *La voix pronominale en ancien et en moyen français*, Ophrys.

対訳

Chênerie, Marie-Luce (1994) : *Le roman de Tristan en prose tome 2*, Éditions Universitaires du Sud.

Queruel, Danielle et Santucci, Monique : *Le roman de Tristan en prose tome 7*, Éditions Universitaires du Sud.

Subrenat, Jean (1999) : *Le roman de Tristan en prose tome 8*, Éditions Universitaires du Sud.

コーパス

Corpus de la littérature médiévale (2001), Champion Électronique.

辞書

Godefroy, Frédéric (1881) : *Dictionnaire de L'ancienne Langue Française et de tous ses dialectes du IX^e au XI^e siècle*, Copyright ©2002 Éditions Champion Électronique

Greimas, Algirdas Julien (2007) : *Grand Dictionnaire Ancien français, La langue du Moyen Âge De 1080 à 1350*, LAROUSSE.

Rey, Alain (1992) : *Dictionnaire Historique De La Langue Française*, Dictionnaire Le Robert – Paris.

現代フランス語に関して

曾我祐典(1999): 「<se+douter>の機能」, 『人文論究』第 49 巻第 1 号 (関西学院大学人文学会)

Gaatone, David (1998) : *Le passif en français*, Duculot.

Guillaume, Gustave (1922) : *Langage et science du langage*, Librairie A.-G.Nizer / Presses de

l'Université Laval Québec.

Poisson-Quinton, Sylvie 他 (2010) : *Grammaire expliquée du français*, CLE International

Riegel, Martin(1994) : *Grammaire méthodique du français*, Quadrige/PUF.

辞書

Lambrechts, Chantal (2006) : *Nouveau dictionnaire de français*, LAROUSSE.

Rey-Debove, Josette (1999) : *Dictionnaire du français*, LE ROBERT & CLE

Rey-Debove, Josette (2004) : *Dictionnaire de la langue française*, LE ROBERT BRIO

Thomas, Adolphe V. (2006) : *Dictionnaire des difficultés de la langue française*, LAROUSSE.

田村毅 他 (2004) : *Royal dictionnaire français-japonais, deuxième édition*, Obun-sha.

(博士課程後期課程)